

春曙文庫蔵『千載和歌集』断簡紹介

短大日本語日本文学科編

はじめに

春曙文庫所蔵の写本中、ここに翻刻・影印して紹介するのは、藤原俊成が撰んだ七番目の勅撰和歌集『千載和歌集』のうち、巻第十七雑歌中の冒頭から五十四首所収の断簡である。新編国歌大観番号でいうと一〇五二番歌から一〇五五番歌までに相当する。

『千載和歌集』の伝本は、約一五〇を超えて現存することが知られている。それらの諸本は大局的にいって異本は存在せず、すべて一系統に属すると考えられている。ただし基準歌三首の出入りによって、一応甲乙丙丁の四類に分類され、作者表記の仕方によって、さらに甲乙と丙丁の二つに分けられている。版本は丙丁類であるが、甲乙に比較的書写年次の古い伝本が多く、近年はこれらの系統の善本を底本にして、活字化されている。その底本のみ校合本を略して挙げると次のようになる。

○笠間叢書17 乙類の静嘉堂文庫本（伝為秀筆本。南北朝頃の筆と推定され「奏覧正本也俊成在判」の奥書がある。）

○新編国歌大観 甲類の陽明文庫本（江戸初期写。奏覧本で校合した旨を記す応永二十六年の宋雅の本奥書がある。なお陽明叢書³に影印がある。）

○岩波文庫 甲類の久保田淳威本（江戸写）

春曙文庫蔵『千載和歌集』断簡紹介

○新日本古典文学大系 乙類の龍門文庫本（鎌倉末頃写、なお龍門文庫善本叢刊第一巻に影印がある。）

○和泉古典叢書 8 乙類の龍門文庫本。

※なお、笠間影印叢刊に乙類の書陵部蔵本（南北朝写）がある。

多くの伝本の大半は近世写本で、成立時期に近いものはないのであるが、その一方で、撰者である俊成自筆の断簡「日野切」が残っている。笠間叢書17巻末の「日野切本文集成」、『古筆学大成』九巻（八十一葉二百二首を収める）、『古筆切資料集成』などに集成されている。日野切は巻十一から巻二十の下帖のみの断簡であるが、撰者自筆の一等資料である。ちなみに、春曙文庫蔵断簡所収歌のうち、「日野切」に見えるのは、九葉十八首（先掲三書による、偽筆・模本などの認定は問わない）である。この自筆の断簡がありながら完本の古写本が少なく、鎌倉期をさかのぼる有力な古写本がないというのが『千載和歌集』の伝本をめぐる現状であろう。

以上のような本文研究の現状にあって、基準歌を含まない部分なので明確な分類はできないが、春曙文庫所蔵『千載和歌集』断簡は、その書写年代の古さからいって、ともかく本文研究に有益かつ貴重な資料であることは間違いない。

本文について

春曙文庫所蔵『千載和歌集』断簡（以下「本断簡」）の本文については、次に歌句の異同を一、二例示するにとどめる。後掲の影印・翻刻を活用されんことを願う次第である。（）内は新編国歌大観番号。

この世にはすむへきほとや盡ぬらんよのつねならすものそかなしき（一〇九四）

右の一首の第五句は、龍門文庫本、陽明文庫本はじめ諸本では「もののかなしき」とあるが、「日野切」では本断簡と同じく「ものそかなしき」であり注意される。なお、次のように「日野切」と本断簡とが異なる場合も多い。例え

ば「はなさかぬ谷のそこにもすまなくにふかくも物をおもふころかな」(一〇六〇)の第五句は、「日野切」ほか諸本「おもふはるかな」(書陵部蔵伝堀河具世筆八代集本は「おもひけるかな」)であり、また、「心あらはにほひをそへよさくら花後の春をはいつかみるへき」(一〇五二)の第五句は、「日野切」(笠間叢書17「日野切本文集成」による)、伝堀河具世筆本は「たれかみるへき」であるが、諸本は本断簡と同じ。

花にそむ心のいかてのこりけんすてはてゝきと思我身を(一〇六六)

右の一首(「日野切」はない)の第五句は、龍門文庫本、陽明文庫本はじめ諸本は「おもふ我身に」であり(八代集抄イ本が本断簡と同じ)、本断簡の独自本文。そのほか例えば、「いかにせむいせのはまをきみかくれておもはぬいその浪にくちなは」(一〇八九)の第五句は、龍門文庫本が「なみにくちなん」とするが、「日野切(模本)」はじめ諸本は本断簡と同じ。「いにしへもそこにしつみ身なれとも猶こひしきはしらかはの水」(一〇八一)の詞書「述懐の哥よみ侍けるときむかし白河の院につかうまつりける事を思てよめる」などは陽明文庫本では「述懐のうたあまたよみ侍ける時むかし白川院にちかくつかうまつりけることをな^どおもひていてよみ侍ける」とある(作者名「藤原家基」の下に「法名素寛」の注記あり、他本も同様)。

こうしてみると、本断簡の本文も注意して扱う必要がある。

以下、簡略に書誌的事項について示しておく。

◇所蔵番号 九一一・一三―S 春一〇二三／◇列帖装／◇縦一六・二糎×横一六・二糎／◇残存十二丁。表十一行、裏十二行を原則として構成。／◇巻第十七雑歌中の冒頭から五十四首所収の残葉からなる。／◇金泥横雲下絵薄朽葉色表紙・料紙雁皮。／◇本書の書写年次であるが、鎌倉時代後期から南北朝頃と目される。

【翻刻本文と影印】

〈凡例〉

* 本文は、漢字・仮名の別、送りがな、仮名遣いなども、全て底本の表記のままとした。

* 異体・通俗の漢字は、原則として底本に従うことにしたが、一部通行の字体に改めたところがある。

* 見せ消ち・補入・分かち書は底本に即した。

* 丁表裏ごとに一行空けて明示した。

千載和歌集卷第十七

雑歌中

五十御賀すきてまたのとしの

春とは殿の桜のさかりに

御せんの花を御らんして

よませたまひける

鳥羽院御製

心あらはにほひをそへよさくら花

後の春をはいつかみるへき

落花の心をよみ侍ける

仁和寺後入道法親王寛性

はかなさをうらみもはてし桜花

うき世はたれもこゝろならねは

僧都頼実みまかりて後又の

としの春禅定院のはなの

さかりなるをみてよみ侍ける

僧正尋範

やともとそ敷花もむかしに、ほへとも

ぬしなき色はさひしかりけり

かしらおろして後東やまの

花みありき侍けるに

圓城寺の花おもしろかりけるを

みてよみ侍ける

前中納言基長

いにしへにかはらさりけり山さくら

花は我をは如何みるらん

遁世の、ち花の哥とてよめる

皇太后宮大夫俊成

雲のうゑのはるこそさらにわすられね

花はかすにもおもひいてしを

いし山にたひくまうて給けるを

はてのたひせきのし水のも

とに御車とめてこのた

ひはかりやと心ほそく御らん

してよませたまひける

東三條院

あまたゝひ行あふさかの関水に

いまはかきりのかけそかなしき

山にのほりてしはしおこなひ

なとし侍ける時よみ侍ける

前大納言公任

いまはとて入なん後そおもほゆる

山ちをふかみとふ人もなし

春ころあはたにまかりてよめる

うき世をは峯の霞やへたつらむ

猶山さとはすみよかりけり

なけく事侍けるころよめる

和泉^式部

はなさかぬ谷のそこにもすまなくに

ふかくも物をおもふころかな

前大納言公任なかたにといふ所に

こもり^るけるときつかはしける

法性寺入道前太政大臣

谷のとをとちやはてつるうくひすの

まつにおとせて春のくれぬる

山寺にこもりて侍けるころ

あめふりて心ほそかりけるに

人のまうてきて哥なとよみ

侍けるついでによめる

道命法師

かくてたに猶あはれなるおく山に

君こぬよを思しらなむ

除目のころつかさ給はらてなけ

き侍けるときのりなかくもとに

つかはしける

大江公資

としことに涙のかはにうかへとも

みはなけられぬ物にそ有ける

寄霞述懐の心をよめる

源仲正

思事なくてや春をすくさまし

うき世へたゝる霞なりせは

よをのかれて後白河の花を

みてよめる

円位法師

ちるをみてかへる心やさくらはな

むかしにかはるしるしなるらん

哥はなの哥あまたよみ侍けるとき

花にそむ心のいかてのこりけん

すてはてゝきと思我身を

佛には桜の花をたてまつれ

我後の世をひとゝふらはゝ

世をそむきて又のとしの

春の花をみてよめる

寂然法師

この春そおもひはかへす桜花

むなしき色にそめし心を

題しらす

世の中をつねなきものと思はずは

いかてか花のちるにたえまし

みやこうつりとなとかやきこえ

ける又のとしのはる白くかはの花

さかりに女の手にてはなの

したにおとしをきて侍ける

よみ人しらす

かくはかりうき世のすゑにいかにして

はるはさくらの猶匂らむ

花のさかりに法成寺にまいり

て金堂の前のはなのちり

けるをみてよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

ふりにけりむかしをしらはさくら花
ちりのすゑをも哀とはみよ

依花待客といへる心をよめる

源定宗朝臣

山さくらはなをあるしとおもはずは
ひとをまつへきはのいほかは

円位法師かすゝめ侍ける百首の
哥の中にはなの哥とてよめる

藤原定家

いつくにて風をも世をもうらみまし
吉野のをくも花はちるなり

花の哥とてよめる

源季広

ふかくおもふことしかなはくこむ世にも

花みるもとやならんとす覧

家に桜をのうゑてよみ侍ける

源師教朝臣

おひいかよにやとに桜をうつしうゑて
猶心みに花をまつかな

高倉院東宮の御時権の亮

に侍けるを参議にて程へける
ころ賀茂のやしらの哥台とて

人々よみ侍けるに述懐の哥とて
よみ侍ける

権中納言実守

くらる山はなをまつこそ久けれ
春のみやこにとしはへしかと

崇徳院の御とき十五首の哥

たてまつりける時述懐の心を

よみ侍ける

右兵衛督公行

かすか山まつにたのみをかくるかな
ふちのすゑ葉の数ならねとも

なげく事侍けるころ読侍ける

前左衛門督公光

ものおもふこゝろやみにもさき立て
うき世をいてんしるへなるへき

述懐の哥とてよめる

俊恵法師

かすならてとしへぬる身は今更に
よをうしとたに思はさりけり

道因法師

いつとても身のうき事はかはらねと
むかしは老を歎やはせし

述懐の哥よみ侍けるとき

むかし白河の院につかうまつ

りける事を思てよめる

藤原家基

いにしへもそこにしつみし身なれとも
猶こひしきはしらかはの水

廣田社の哥合によめる

藤原盛方朝臣

あはれてふひともなきみをうしとても
我さへいかゝいとひはつへき

右大将実房中将に侍ける時

十五首の哥よみ侍ける時述懐

の哥とてよめる

中原師尚

数ならぬ身をうき雲のはれぬ哉
さすかに家の風はふけとも

学問料申侍けるを給はらす

侍ける時人のとふらへりける返

事につかはしける

大江匡範

おもひやれとよにあまれるともし火の
かゝけかねたるこゝろ細さを

題不知 藤原公重朝臣

世のうさをおもひしのふと人もみよ

かくてふるやのゝきの気色を

菅原是忠

ひく人もななくてすてたる心つよきもかひなかりけり

二條院参河内侍

いかてわれひま行駒を引とめて

むかしにかへるみちをたつねん

撰政右大臣の時の家の哥合に

述懐の哥とてよめる

源師光

いまはたゝいけらぬものに身をなして

むまれぬのちの世にもふるかな

つかさめしにいせになりけるを

しゝ申ける時大僧正行尊か

もとにつかはしける

源俊重

いかにせむいせのはまをきみかくれて

おもはぬいその浪にくちなは

たなかみの山さとにすみ侍ける

ころ風はけしかりける夜

よめる

源俊頼朝臣

まきのとを宮まおろしにたゝかれて

とふにつけてもぬるゝ袖かな

山田のいほに煙のたちける

をみてよめる

橘盛長

お山田のいほにたくひのありなしに

たつ煙もや雲となるらん

堀河の院の御時百首の哥た

てまつりける時山家の心をよめる

二條院太皇太后宮肥後

山さとのしはおりくゝにたつけふり

ひとまれ也とそらにしるかな

なか月のつこもりかたわつらふ

事ありてたのもしけなく

覚ければひさしくとはぬ人に

つかはしける

藤原基俊

秋はつるかれのゝ虫のこゑたえは

ありやなしやを人のとへかし

女のもとにまかりて月のあかく

侍けるにそらの気色も物こゝろ

ほそく侍ければよみ侍ける

藤原道信朝臣

この世にはすむへきほとや盡ぬらん

よのつねならすものそかなしき

題不知 泉式部

命あらはいかさまにせん むしたに秋はこそなけ

紫式部

かすならて心にみをはまかせねと

身にしたかふはこゝろ成けり

つねよりも世の中はかなく聞

けるころさかみかもとにつかはしける

藤原兼房朝臣

あはれともたれかは我を思いてむ

ある世をたにもとふ人もなし

前大納言公任 なかつた なかたにすみ侍

けるころ風はけしかりける

よのあしたにつかはしける

中納言定頼

ふるさとのいたまの風にねさめして

谷のあらしを思こそやれ

返し 前大納言公任

谷風の身にしむことにふる里の

木のもとをこそ思やりつれ

前大納言公任入道し侍て

長たに侍ける時僧のさう

そくほうふくなとおくり侍とて

つかはしける

法成寺入道前太政大臣

いにしへは思かけきやとりかはし

かくきむものとのりの衣を

かへし 入道前大納言公任

おなしとし契しあれは君かきる

のりのころもをたちをくれめや

三条の院かくれさせたまひて

後かの院のまへを過けるに

松の梢おなしさまにてつい

かきところくくつれたるに

むくらのしけりたるをみて

そのうちにかうしうか侍けるに

つかはしける

弁乳母

むかしみし松のこすゑはそれなから

むくらのかとをさしてける哉

一品聡子内親王仁和寺に

すみ侍ける冬ころかけひの

こほりを三のみこのもとに

おくられて侍ければつかはしける

輔仁のみこ

山さとのかけひの水のこほれるは

おときくよりもさひしかりけり

返し 聡子内親王

山さとのさひしきやとのすみかにも

かけひの水のとくるをそまつ

大納言実家もとに三十六人

集をかへしつかはしけるなかにこ

おほるの御門の右大臣の書

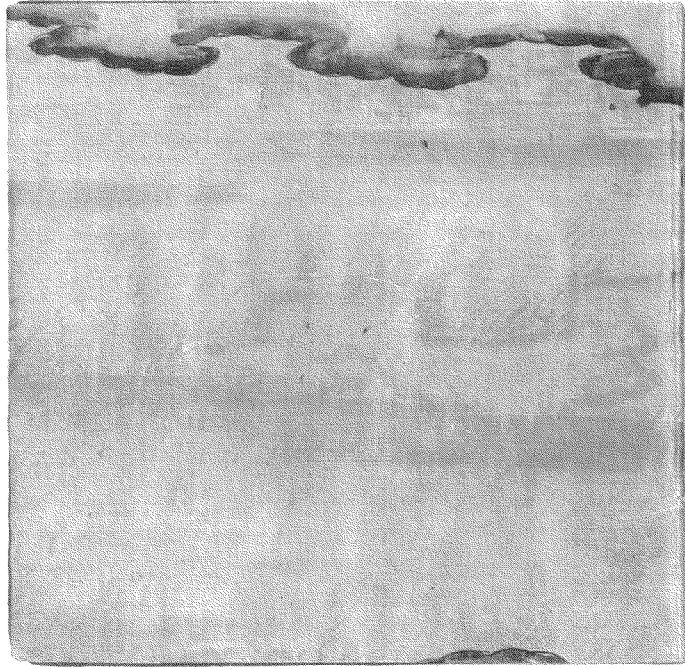
て侍ける草子にかきて

をしつけられて侍ける

大皇太后宮

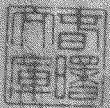
このもとにかきあつめたる事の葉を

別し秋のかたみとそみる



全載和歌集卷第十七

兼歌中



ふり沙びてしやきり
まよひしぬの橋乃こりり
ゆきしの花はかりり

鳥羽院

鳥羽院

ふり沙びてしやきり
まよひしぬの橋乃こりり
ゆきしの花はかりり

鳥羽院

仁和寺

しふさをうりまはさし一様
うはせむはむしうむね

僧部頼らまきりし後乃の
かき乃き禅定院のら乃
ゆるとりまきりしゆき

僧正あ靴

下りやまもあしりてを

ゆきまきりしゆき

かきりまきりしゆき

花もあきりしゆき

同殿のあきりしゆき

ゆきまきりしゆき



あゆめまきり

ゆきまきりしゆき

ゆきまきりしゆき

道々のら花のまきりし

皇太后宮太后

ゆきまきりしゆき

ゆきまきりしゆき

ゆきまきりしゆき

ゆきまきりしゆき

ゆきまきりしゆき

ゆきまきりしゆき

しんじゆのついでにやん

東三條院

あまのついでにのりまの用取よ

いんげんやうり乃ちまきまき

山よりやうりまきまき

いんげんやうり乃ちまきまき

前大徳まき

いんげんやうり乃ちまきまき

山よりやうりまきまき

あまのついでにのりまの用取よ

いんげんやうり乃ちまきまき

山よりやうりまきまき

あまのついでにのりまの用取よ

和泉

いんげんやうり乃ちまきまき

あまのついでにのりまの用取よ

いんげんやうり乃ちまきまき

あまのついでにのりまの用取よ

いんげんやうり乃ちまきまき

あまのついでにのりまの用取よ

いんげんやうり乃ちまきまき

あまのついでにのりまの用取よ

いんげんやうり乃ちまきまき

人乃もてきてきりて
何れもはやくしあはる

道令活所

かゝるはた移あはれりて
まゝにわたりてしるる

陸田のつらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

大江の
つらき所を

少くも
つらき所を

つらき所を
まぬきてしるる

家老の
つらき所を

源伸正

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を

田代正

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

つらき所を
まぬきてしるる

佛 入 櫻乃 糸 乃 糸 乃 糸

友 乃 乃 世 乃 乃 乃 乃 乃

世 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

世 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

宇 乃 乃 乃 乃

こ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

も 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

色 乃 乃 乃

世 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

皇 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

休む行客といつらんをある

源実朝

山さうらもかをあうしと介りし
あをよるをせし　そのいかに

田原は所々すかぬなる百の

方乃まよしらのまろくしある

若原実朝

いほくく風をせせりしを

昔のそくもせしを

あのをくしある

源実朝

少くおしし　さうしを

花をくしある

あのをくしある

源実朝

おひしとたや　あをくしある

あのをくしある

高合殿　あをくしある

あのをくしある

あのをくしある

あのをくしある

あのをくしある

源実朝

くら井山もささふ、かろへ
暮乃こや、こや、こや

空徳院乃り、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや

右兵庫若尾

かすこふ、こや、こや、こや、こや

くら乃て、こや、こやの、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

あか連、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

迷懐乃、こや、こや

後書、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

こや、こや、こや、こや、こや、こや

いししきしき、ふとほしき身中
ねえいふまへ、いふまへなり

店田松乃、ま合ひあり

藤原盛言、なり

あつて、まへしき、まへしき、まへしき
我、まへしき、まへしき、まへしき

右大将、まへしき、まへしき、まへしき

十、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

乃、まへしき、まへしき

中、まへしき

ね、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

長、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

ね、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

乃、まへしき、まへしき

大、まへしき

ね、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

ま、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

ね、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

ま、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

ま、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

ま、まへしき

ま、まへしき、まへしき、まへしき、まへしき

二 隆院音の口は

いさくも移りてはしむるをいさく
ひらいたるをいさくをいさく

格取右天下乃叶の家のみ命

正徳のまゝなり

隆竹光

いさくもいさくをいさく
ひらいたるをいさくをいさく

つらつらにいさくをいさく

まじりけるをいさくをいさく

いさくをいさく

隆俊也

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

いさくもいさくをいさく

隆國也

お山田乃いりいさひのあやうに
ふけたりやまをひかりしん

堀あり院のふけ百子のあや

てよつとつらつら時山家乃んをよ

二條院皇太后院

山よのしんたをたふあけり

ちをれいさうたふらる

さう月乃ほいりいさうさう

ゆちうそこのゆりけり

えんをれあさくさうのま

つらりさる

散姫長後

俺もつるまの虫乃とてま

りよやまのま

其のたふりく月のま

はるはるのまをいおん

まうけをぬまをぬま

十右衛門道信

こ乃せりまむのりやむかえ

よのぬまのりま

しんせう 日景

今よりいりいさひのあやうに

白雲社

かきつるもあはれしうきをばはるるあはれと
あはれしたるあはれなるあはれなる

つねにうきをばはるるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれ

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれ

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなる

くまじし乃乃のれを

入る余大畑を

わろしとてきしとひとてき
乃乃のれとてきしとひとてき

三平のれとてきしとひとてき

下段のれとてきしとひとてき

木のれとてきしとひとてき

おのれとてきしとひとてき

おのれとてきしとひとてき

おのれとてきしとひとてき

開歌

おのれとてきしとひとてき

おのれとてきしとひとてき

一平のれとてきしとひとてき

下段のれとてきしとひとてき

木のれとてきしとひとてき

おのれとてきしとひとてき

怖仁乃

山のれとてきしとひとてき

おのれとてきしとひとてき

ね 狂言抄

山いふのいしよすのいしよす
かきい乃あのかるるをきう

不地い言家しし三十五

是きうつりけらるる

木り舟のゆいの石をり

てかをまきりうかく

そしうけれらるる

大石太石

お乃いしよすのいしよす

お乃いしよすのいしよす

